

1 学習習慣と学力について

(1) 家庭での宿題等に計画を立てて規則正しく取り組めることと学力の間には、非常に強い関係がある。

- 「家庭での勉強時間」と正答率には、小・中学生共に深い相関がある。これまでも同様の傾向がある。
- 「家で計画を立てて勉強している」「家で宿題をしている」と正答率には、小・中学生共に相関がある。これまでも同様の傾向がある。

(2) 教科が好きで、理解がすすみ、意義や有用感をもつことと学力の間には大きな関係がある。

- 国語の「勉強が好き」「大切だと思う」「授業の内容がよく分かる」「将来、社会に出たときに役に立つ」と思ったり考えたりしていることと正答率には、小・中学生共に深い相関がある。これまでも同様の傾向がある。
- 算数・数学の「勉強が好き」「大切だと思う」「授業の内容がよく分かる」「将来、社会に出たときに役に立つ」と思ったり考えたりしていることと正答率には、小・中学生共に深い相関がある。これまでも同様の傾向がある。

(3) 読書と、特に国語の学力には大きな関係がある。

- 「読書が好き」と正答率には、小・中学校共に相関が深く、特に中学校ではかなり深い。

(4) 話し合い活動をする、自分の考えを話したり書いたりする、うまく伝えるように話の組み立てを考える、考えの理由が分かるように書くことと、学力の間には大きな関係がある。

- 「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意」であることと正答率には、小学校において深い相関がある。
- 「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりする」ことと正答率には小・中学校共に深い相関がある。
- 「国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝えるように話の組み立てを工夫している」ことと正答率には、小・中学校共に深い相関がある。
- 「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がわかるように気を付けて書く」ことと、正答率には、小・中学校共に深い相関がある。特に小学校ではかなり深い。

(5) 「総合的な学習の時間」の充実と、学力の間には大きな関係がある。

- 「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べた事を発表するなどの学習活動に取り組んでいる」と正答率には小・中学校共に相関が深く、特に小学校ではかなり深い。

<指導上の留意事項>

①家庭学習の習慣化に依然として課題がある。

- ・学校では、授業の内容と宿題の関係を吟味したうえで、適切な宿題を与えることについて、いっそうの工夫をはかることが必要である。
- ・予習や復習の意味について、わかりやすく説明すると共に、予習や復習の意義が実感化できるような授業づくりについても工夫を加える必要がある。
- ・苦手な教科についての勉強方法について丁寧に指導すると共に、家庭での克服方法を保護者と連携しながら共有化できるようにすることが必要である。
- ・家庭における学習習慣の確立については、学級担任に一任することなく、学校をあげて、多くの機会、方法をとらえて、アプローチしていく必要がある。
- ・発展的な課題・学習にとりくむことが望ましい子どもには、自学自習の発展のさせ方を知らせていくことも大切である。

②授業づくりの工夫、指導の向上がよりいっそう求められる。

- ・教科を好きにさせることが学力向上の第一歩である。子どもの関心・意欲を引き出し、勉強した事への満足感が感じられる授業の工夫が必要である。
- ・知識や技能が定着し、「わかった」「できるようになった」という理解感、達成感を子どもが感じることができる丁寧な指導が求められる。
- ・教科を学ぶ意義や意味、有用性についても、子どもが理解できるような授業づくりが必要である。

③読書指導のいっそうの充実が求められる。

- ・読書については、各方面で述べられているとおり、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていくために不可欠なものである。
- ・読書習慣を身に付けることは、一生の財産として生きる力となるばかりでなく、情報化社会の進展の中で、自ら考え、判断する力を培うためにもいっそう必要になってくる。国語科を中心に、他方面における読書指導の充実が求められる。

④話し合い活動の充実が求められる。

- ・自分でじっくりと考え、それを話したり書いたりするときに、理由や根拠を挙げながら話の組み立てを考え、それを友だちと交流しながら深めていくという、学びのスタイルを重視していくことが求められる。
- ・教師から情報を伝達する一方通行型の授業から、児童生徒が自ら声を発して学び取っていく授業を創りあげていく必要がある。

⑤「総合的な学習の時間」の充実が求められる。

- ・小学校低学年の生活科、小学校3年生からの「総合的な学習の時間」において、自ら課題を立て、個人やグループで追求・追究する活動をとおして、学ぶことの楽しさや意義を感じることが、学ぶことの質的向上につながると考えられる。

2 生活習慣と学力について

(1) 基本的な生活習慣や家庭でのコミュニケーションが確立されていることと学力の間には、非常に強い関係がある。

- 「朝食を毎日食べていること」「同じくらいの時刻に寝ている」と正答率には、小・中学校共に深い相関がある。これまでも同様の傾向がある。
- 「家の人（兄弟姉妹を除く）と学校での出来事について話をしている」「家の人（兄弟姉妹を除く）は、授業参観や運動会などの学校の行事によく来る」と正答率には小・中学校共に相関が深く、特に小学校ではかなり深い。これまでも同様の傾向がある。

(2) 規範意識をもっていることと学力の間には関係がある。

- 「学校のきまり（規則）を守っている」「いじめは、どんな理由があってもいけけないことだと思う」と正答率には、小・中学校共に相関がある。これまでも同様の傾向がある。

(3) 自尊意識をもっていることと学力の間には関係がある。

- 「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「難しいことでも失敗を恐れないで挑戦している」「自分にはよいところがある」と思っていることと正答率には、小・中学生共に相関がある。これまでも同様の傾向がある。

<指導上の留意事項>

①基本的な生活習慣の確立へむけての取り組みが求められる。

- ・概ね良好な現状があるが、今後についても、規則正しい生活習慣を学校と家庭が連携を深める中で、確立していく必要がある。

②規範意識を日常から大切にできる子どもの育成をはかる

- ・おおむね増加傾向にあり、良好である。家庭や地域との連携を深めながら育んでいく必要がある。

③自己肯定感、自己有用感をもてる生活づくりへの取り組みが求められる。

- ・すべての項目において、前年度に比べて伸びが見られている。中学校では全国平均を超える項目がある。引き続き、粘り強く物事に取り組み、達成感が得られ、自分に自信をもてる生活づくりを、学校・家庭の協力の中で育んでいく必要がある。